

琉球弧世界遺産フォーラム

News Letter No. 18

2022年9月

もくじ

次の50年を考える今年の世界遺産-----	編集担当記
座喜味城跡の保存活用について-----	仲宗根 求
中城城跡における保存管理と活用について ～中城村・北中城村の取り組み～-----	渡久地 真・小橋川 剛
世界遺産普及公開講座 概報-----	花井 正光
連載 人と自然の民俗誌 第7回クバの島・伊平屋島 人とクバの物語-----	西江 重信

次の50年を考える今年の世界遺産

世界遺産条約は今年50周年の節目を迎えました。これまで登録された世界遺産は1,154件にのぼっています。増える一方の世界遺産に対し、保全の手立てが十分でないのを懸念する専門家も多く、何年も前から世界遺産委員会で大きな課題にされてきています。次の50年に向けた取り組みをテーマに、今年世界各地で開催される50周年記念イベントでの議論や成果が期待されます。

ところで、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」は2020年に登録20周年を迎え、多彩な記念イベントが沖縄県や関係自治体により企画されましたが、打ち続くコロナ禍のため一部のプログラムだけで終わったのが悔やまれます。20周年という節目に多くの県民に世界遺産の活かし方や保存管理のあり方について思いを巡らしてもらおう折角の機会を逃したのですから。この世界文化遺産は、種類の異なる9つの資産が7市村に散在する「連続性のある資産」であることから、世界遺産条約のルールに基づいて包括的保存管理計画が策定され、その指針にそって構成資産の保存と活用が取り組まれています。今号は登録資産である中城城跡と座喜味城跡での取り組みの様子を紹介していただきました。

当フォーラムが例年開催してきた市民向け公開講座も、一昨年と去年はやはりコロナ禍のため開けませんでした。そうしたなか、小康状態にあった今年7月、奄美・沖縄の世界自然遺産登録地がある沖縄島北部の大宜味村にある沖縄県立辺土名高等学校と地元の団体との協働により公開講座を開催でき、若者が多く参加してくれました。自然遺産といえども地域の歴史や文化と切り離して将来世代に継承できるはずもなく、生物文化多様性に着目して地域の暮らしと自然を結び付けるあり方が、確かな世界遺産の保全にも通じるのではないかと。講演3題とパネル討論を通してそうした見方や考え方がテーマになった講座でした。この公開講座の概報を掲載しました。

(琉球弧世界遺産フォーラム News Letter 編集担当記)

発行：琉球弧世界遺産フォーラム（琉球弧世界遺産学会）

ryusefo@gmail.com

座喜味城跡の保存活用について

仲宗根 求（読谷村教育委員会）

座喜味城跡の保存

座喜味城跡は核となる国指定史跡（文化財保護法で規定）を中心に、座喜味城跡公園（都市公園法で規定）、そして緩衝地帯（読谷村座喜味城跡の環境保全に関する条例で規定）が取り囲んでいます。

2020（令和2）年3月には読谷村教育委員会によって「国指定史跡座喜味城跡保存活用計画書」が策定されました。計画書によると座喜味城跡の保存管理の目的は、史跡のもっている内容や意義などの情報を正確に、永く維持するため、①グスク時代から残存する遺構の保存。②遺構の経年変化や災害によって本質的価値に影響をおよぼす場合には、適切な保存措置。③整備された遺構の劣化や来場者の増加に伴う本質的価値や安全面、景観を損なう場合の修繕。④き損箇所



戦前の座喜味城跡（読谷山尋常小学校からの遠望）

の把握。⑤災害対策の検討。⑥史跡指定範囲の明確化。⑦民有地の公有化。⑧除草作業の継続。⑨植生保全のあり方の検討。⑩現状変更の許可基準や保全重要度に応じたゾーニングの設定。⑪未調査箇所における発掘調査の実施。⑫更なる調査研究。⑬既存資料の保存管理のためのデジタル化が必要とまとめられています。

具体的課題として、土砂崩れの発生、城壁のはらみ、胸壁の整備、周辺景観を眺望する際の安全対策、成長した琉球松の取り扱い、遊歩道の整備、説明板の設置、既設トイレの老朽化、休憩施設の整備などがあります。これらの課題を克服し、文化財保護のみならず、観光や地域振興に寄与する必要がある、今後は策定された計画書を基に座喜味城跡の保存管理を進めていくこととなります。

計画書では本質的価値を損なわず史跡を未来へ継承するために、そして更なる価値を高めるために再整備を実施すること、来客者が安全に史跡の魅力を楽しめる整備の必要性が提唱されています。本質的価値を高める整備の一例を示すと、高さが推定できる状況にある胸壁の整備や城門の扉の整備を検討することがあります。



座喜味城跡を上空からみた写真

座喜味城跡の活用

ガイダンス施設：座喜味城跡のガイダンス機能を持つ「世界遺産座喜味城跡ユンタンザミュージアム」が2018（平成30）年6月にオープンしました。施設は常設展示室が3つと企画展示室が1つあります。

1階の常設展示室1は、「世界遺産・座喜味城跡」と題し、◎グスク時代の始まり ◎護佐丸と座喜味城

◎座喜味城のつくり ◎世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の構成となっています。「読谷で育まれた文化遺産」では、◎やちむんの里の原点・喜名焼 ◎技を紡ぐ読谷山花織 ◎喜名番所跡 ◎農業発展に尽くした二人 ◎おもろさうしに詠まれる先人を紹介しています。

2階の常設展示室2は、「読谷村の豊かな自然と土壌」、「掘り出された読谷の歴史」、「読谷山の人々の暮らし」、「読谷山の沖縄戦と戦後の村づくり」があります。3階の常設展示室3は、人間国宝金城次郎展と絵画・織物などの美術工芸が展示されています。

ガイダンス施設を出ると目の前に座喜味城跡があり、施設と併せて見学すると座喜味城跡を効果的に理解することができます。また、2022（令和4）年度から利用者の利便のためにバス10台、乗用車60台の収容可能な駐車場も新たに整備します。

城壁のライトアップ：座喜味城跡の魅力は曲線を多用した城壁です。夜間にこの城壁に照明をあて城壁の美しさを浮かび上がらせ、当時の築城技術の高さを感じてもらうため2019（令和元）年に「光の森」・「城壁の彩」・「宴」をテーマにライトアップを実施しました。

ウエディングフォト：2019（令和元）年度は333件の利用があり、城壁をバックに琉装や洋装等による婚礼写真の撮影がおこなわれ、座喜味城跡が一生の思い出として心に刻み込まれています。

自然観察コース：1979（昭和54）年度の座喜味城跡の城壁修復整備時に貴重種（沖縄県版レッドデータブック：絶滅危惧種ⅠA類）のトキワトラノオ（シダ植物）が発見され、整備区域から近くの城壁へ移植されました。しかし、20数年確認できない状態であったが、2022（令和4）年6月の植生相調査で複数株が確認されました。今後は専門家の助言を受け、保存・活用に向け取り組む必要があります。

城跡東側傾斜地の緩衝地帯は、座喜味城跡公園となっており、沖縄本島北部からの地質や植生の南限となっています。地上に1mほど浮かせた橋梁づくりの木道（遊歩道）が設置され、自然とふれあえる空間で、鳥類（ヒヨドリ、メジロ、ウグイス、ツミ、アカショウビン、サンコウチョウほか）が複数確認されています。哺乳類ではオリオオコウモリの食痕としてハマイヌビワ



ユンタンザミュージアムの正面外観写真



常設展示室1の座喜味城跡コーナーの写真



座喜味城跡ライトアップ



木道のようにす

とクワノハエノキのペリットが落ちていました。両生類ではオキナワアオガエルのオタマジャクシが水たまりで多数みられます。爬虫類ではアカマタ、ホオグロヤモリ、ヘリグロヒメトカゲが、昆虫類ではハラビロカマキリ、オオゴマダラ、植物ではテンニンカやイジュ、ホウライムラサキなどの花が見られます。2022（令和4）年度はさらなる調査をし、自然観察会や講座を充実させ、小冊子づくりの資料収集を行います。

座喜味城通り：座喜味自治会館から座喜味城跡に至る現代の車道は、石畳み張りの歩道が付き座喜味城通りと名付けられています。通りの途中には島まるみの瓦屋（移築の木造赤瓦屋）や地元婦人会が手入れした花壇があります。通りでは毎年10月最後の日曜日には歩行者天国「座喜味城通りふれあいまつり」が催され、舞台発表や出店で賑わっています。

更なる調査研究の必要性

座喜味城跡は城郭内を発掘したのみで、城郭外の調査は不十分で、周辺がどのようになっていたかは疑問が付きません。座喜味城跡の機能を確認するために、周辺を更に調査研究する必要があります。具体的には、◎城郭外で発掘調査を実施し、堀切や腰曲輪などの防御遺構の残存確認。◎城門への道と長浜とを往来する「ナガハマミチ」の調査があります。

座喜味城跡は単体ではなく、他のグスクと補完的につながっていると考えられます。周辺のタカヤマグシクやシナハグシクは、拝所や古墓が現存することから拝所のグスクと従来考えられてきました。しかし、これらを踏査してみると、元々は座喜味城跡と結びつく見張りの支城であったと思われ、改めて調査する必要があります。

タカヤマグシクを踏査したところ、そこからの眺望は良く、長浜の入江や河川沿い（現在は長浜ダム湖）を望むことができます。座喜味城跡との直線距離も約500mで城壁上の人影も目視でき、連絡がとれそうです。タカヤマグシクの中腹には腰曲輪と思われる遺構が3箇所ほどあり、防御を意識しています。時期を判定する遺物が未だ得られていませんが、今後の調査によっては座喜味城跡と関連するグスクになるかもしれません。

シナハグシクを踏査したところ、そこは琉球石灰岩からなる急峻な丘陵ですが、中腹には螺旋状の帯曲輪が確認できました。頂上の琉球石灰岩の凸凹は整地され、グスク時代か、それ以前の土器が出土します。整地された頂上からは長浜の入江や残波岬方面の船の動きが手に取るように見え、洋上を見張るには格好の丘陵となっています。



座喜味城跡からタカヤマグシク方面をみる

おわりに

「遺産の最大の保全方法は活用すること」といわれています。座喜味城跡は、いつでも、だれでもが、いこいの場や散策の場として利用しています。地域住民が遺産と日常的に触れることによって保全する意識が高まり、継承につながると考えています。

中城城跡における保存管理と活用について ～中城村・北中城村の取り組み～

渡久地 真（中城村教育委員会）
小橋川 剛（北中城村教育委員会）

中城城跡の歴史的背景

中城城跡は、標高約 160 m の石灰岩丘陵上に築かれた 6 つの郭からなるグスクです。グスクからは東側に中城湾、西側に宜野湾市や東シナ海、北側に勝連半島から読谷、南側に知念半島から浦添までを見渡すことができます。グスクの東側は切り立った崖で、西側は急勾配の斜面となっており、守りやすく攻め難い要害の地に築かれています。

伝承では先中城按司が一の郭・二の郭・南の郭・西の郭を築いたとされており、近年の発掘調査から遅くとも 14 世紀後半には石積みの城郭が築かれていたということが分ってきました。

1440 年頃、中山王の命により当時勢力を拡大していた勝連グスク城主の阿麻和利を牽制するため、読谷山按司の護佐丸が座喜味グスクから中城グスクに移されたとされています。護佐丸は北の郭と三の郭を増築したといわれており、三の郭は別名「ミーグスク」（新城）と呼ばれています。

中城城跡では 3 種類の石積みを見ることができ、中先城按司の築いた郭は野面積みと布積み、護佐丸の増築とされる三の郭と北の郭が当時の最新技法である相方積みで築かれています。

1458 年護佐丸・阿麻和利の乱がおこり、阿麻和利の策略により護佐丸は自害に追い込まれました。

その後、中城間切は尚真王（在位 1527 ～ 1555 年）が王子のときに世嗣領となります。『中山世譜』によれば、尚清王が世子の頃「遠く中城におられたので、首里に別邸（後の大美御殿）を造営し」云々とあることから、そのころは王族がグスクに居住していたと考えられます。



中城城跡空撮写真



一の郭東側アーチ門及び城壁



三の郭東側城壁

1729年には一の郭に間切番所が置かれ、沖縄戦より前までは番所や役場として使用されました。

1853年琉球に来航したペリー提督は、探検隊を編成して島内調査を命じました。その際に同探検隊は、中城城跡を訪れて測量等の調査を行い築城技術の高さを賞賛しています。

1945年沖縄戦により役場の建物は失われてしまいましたが、グスク自体は奇跡的に大きな戦禍を受けずほぼ往時と変わらぬ姿を留めることができました。

1950年～1980年代は城郭周辺に遊園地や動物園が造られ、多くの人々が訪れました。

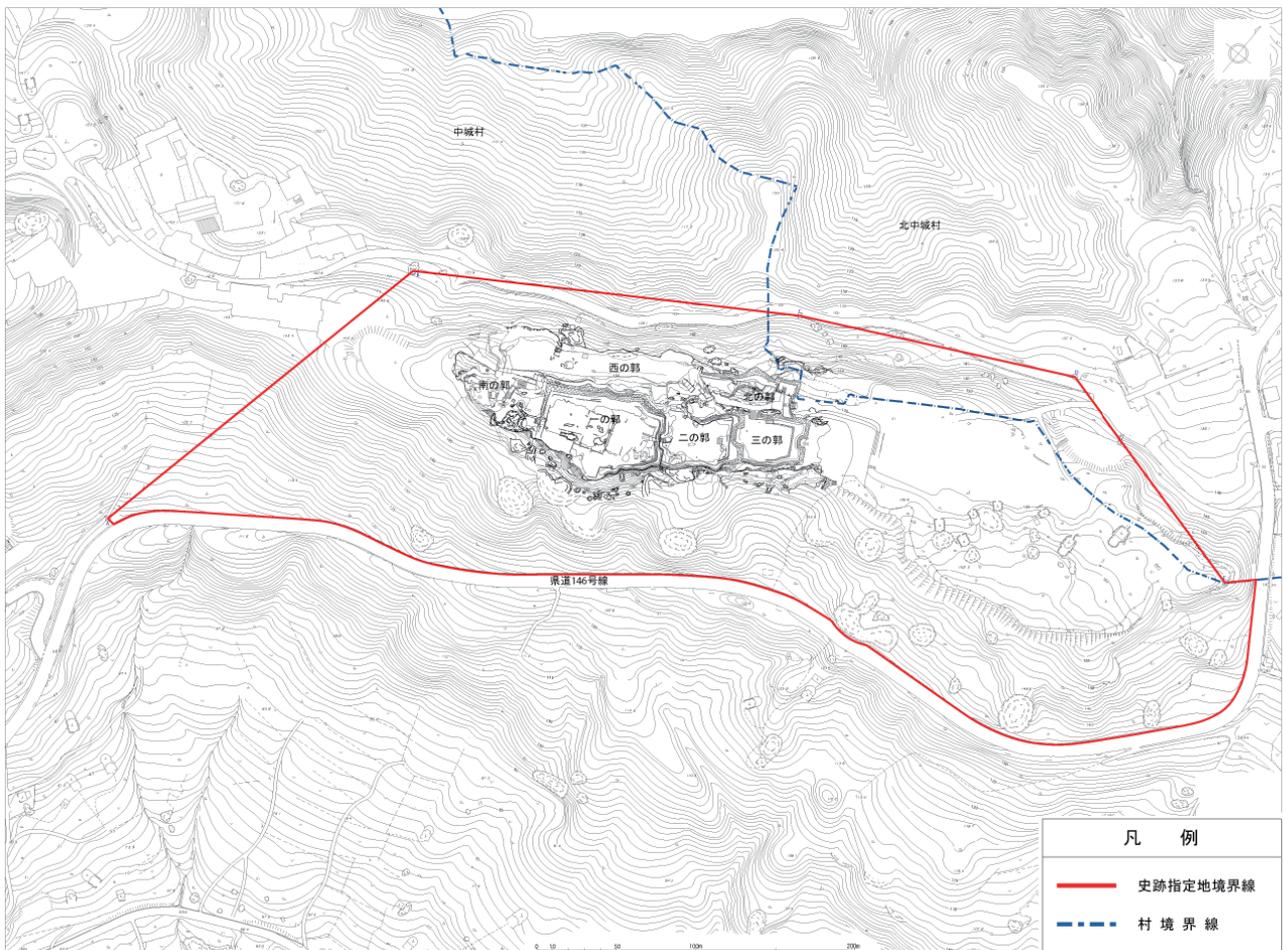
1955年には琉球政府の重要文化財、史跡、名勝に指定され、1958年に特別史跡、1962年に特別重要文化財に指定されました。1972年、沖縄の本土復帰とともに国の史跡に指定され、2000年には「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の構成資産のひとつとして世界遺産に登録されました。



三の郭前広場の遊園地写真

中城城跡の保存に関わる取り組み

中城城跡は、中城村と北中城村の境界に位置し、史跡指定地は両村にまたがっており、1994年に両村で中城城跡共同管理協議会を設立して維持管理にあたっています。1995年からは城郭が位置している中城村が史跡整備事業を開始し、年次計画にしたがって発掘調査や城壁等の修理工事を行っています。



中城城跡平面図

1996年には史跡指定地も含めた周辺地域約98haを沖縄県が「中城公園」として整備する都市計画が決定され、中城城跡を核として沖縄の歴史・文化・自然を体験、学習できる公園として整備が進められており、同事業により中城城跡の近接した位置にあった大型廃墟（ホテル跡）が2019年に撤去され、景観が大きく改善されました。

2000年の中城城跡の世界遺産登録に当たって、北中城村では字荻道・大城の両地区がバッファゾーン（緩衝地帯）となりました。同地区では、1998年に「古城周辺歴史的景観実施計画」を策定し、1999年には住民参加のまちづくりと歴史的・文化的景観を誇りとする集落形成などを目標として、荻道・大城の両自治会と北中城村で「北中城村全村植物公苑づくり条例」に基づく「古城周辺地区景観協定」を締結しました。これにより、同地区は条例に基づく景観形成地区と位置付けられ、建築物及び工作物の新築等や屋外広告物の掲出、宅地造成等について届出が義務付けられました。これらの理念は、2017年に策定された「北中城村景観計画」にも引き継がれ荻道・大城地区は同計画の重点地区に指定され、景観の保全に努めています。

中城村の取り組みとしては、「中城村自然環境の確保に関する条例」を制定し、字泊・字伊舎堂・字添石の一部にバッファゾーン（緩衝地帯）を設け、景観の保全に努めています。

中城城跡の活用に関する取り組み

中城城跡の観覧者数は、2000年の世界遺産登録から順調に推移し、2016年、2017年には約13万人まで増加しました。2018年、2019年には約11～12万人と若干の減少に転じ、2020年には新型コロナウイルスの影響により約5万人、2021年は約3万人と大幅に減少しています。この新型コロナウイルスの感染拡大前までは、下記のように両村共催、又は、単独によるイベント事業のほか、民間企業によるイベントが数多く開催されており、県内外から多くの人々が訪れていました。

(1) 中城村の取り組み

城郭外側の広場では、三の郭の城壁を利用した「世界遺産中城城跡プロジェクションマッピング」や冬至の日の出を眺める「わかてだを見るつどい」、城内各所でツワブキの花が満開となる1月上旬にあわせて両村文化協会が古典舞踊等で観覧者を迎える「ツワブキまつり」などを毎年実施しています。その他にもコンサートや民俗芸能の上演を中心に3年おきに実施している「護佐丸まつり」や、世界遺産の城壁を背景にした著名歌手のコンサート（世界遺産劇場実行委員会等）、「野村萬斎 中城狂言」、「市川海老蔵 特別公演会」なども開催しており、資産の活用や来場者の増加につながっています。

さらに、中城村観光協会では全国の城好きに人気のある御城印や武将印を県内で初めて作成し、中城城跡の窓口などで販売しており、今年はこの御城印が世界遺産の5カ所のグスク全てで出揃ったことから、観光客の各資産周遊のきっかけの一助になるものと考えられます。



プロジェクションマッピング(上・下)



御城印・武将印

また中城村では、2015年度から全国初の試みとして、中城村立小学校3校が文部科学省の特例校に指定され、各学年が中城城跡や護佐丸を中心とした地域の歴史や文化等を学ぶ「中城ごさまる科」が実施されており、副読本による学習のほか、中城城跡や護佐丸歴史資料図書館での学習などを行っています。そのことにより、児童の護佐丸や中城城跡、琉球史についての知識はかなり深まっており、児童が中城村に誇りを持ち、地域への愛着を育むことにも繋がっています。

(2) 北中城村の取り組み

コロナ禍以前の北中城村の中城城跡の活用として、三の郭外側の広場で、北中城村の各青年会のエイサーを観賞できる北中城村青年エイサー祭りを不定期で開催しています。また、同広場を利用し、中城城跡の石積みを見据え朝日を浴びての朝ヨガや、月明かりの下での夜ヨガを開催しています。北中城村は2005年から3期（15年）連続で女性長寿日本一を記録しており、同取り組みは健康づくりの増進という村の主要課題の実現とも連動しており、舞台など大規模な仮設物を必要としないため遺跡への負荷が少なく、年に複数回の開催が可能であり非常に有意義なイベントであると考えております。



朝ヨガ



北中城村青年エイサー祭り

今後の課題（まとめに代えて）

沖縄県教育委員会が2012年に策定した「琉球王国のグスク及び関連遺産群」包括的保存管理計画では、包括的保存管理の理念として〈世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」を保存し活用することで、その顕著な普遍的価値を次世代へと確実に継承することを基本とする。また、本遺産が琉球地方の歴史文化の象徴的存在であるということを踏まえ、世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」と、遺産の立地環境の特徴を表わす周辺地域の景観や関連する歴史文化資源等が一体となって表す本遺産の特質をも、適切に継承することを理念とする。〉と掲げており、世界遺産としての『顕著な普遍的な価値』だけでなく関連性を有する多種多様な有形・無形の歴史文化資源等が遺産と一体となって形成する『特質』を継承していくことが遺産の理解の促進に大きな役割を果たすと示しています。



中村家住宅

北中城村には、中城城跡に隣接する大城地区と荻道地区に、国指定重要文化財（建造物）の中村家住宅（大城地区）や国指定史跡の荻堂貝塚（荻道地区）などの国指定文化財や、平成の名水百選に選定された荻道・大城湧水群、歩きたくなる道500選に選定された荻道・大城集落などの文化財や景観を有しています。これらの資産を活かしたコンテンツや計画等が以前から作成されておりますが、今後はより中城城跡と一



荻堂貝塚

体となった取り組みを行い中城城跡だけでなく、周辺地域も含めた魅力発信を行い、中城城跡を有する景観の保全へと繋がるような取り組みを進めていきたいと思ひます。

中城村側では、かつて首里王府と中城グスクをつないでいた中城ハンタ道（村内の呼称）を2006年度から10カ年かけて、西原町境から中城城跡付近までの区間約6kmを整備（歴史の道100選）しており、2022年度からは中城城跡付近にあった大型廃墟が撤去されたことにより、残っていた未整備区間約250mの整備を行い、2025年には道を中城城跡まで

つなげて全線を開通させる計画です。さらに今後は、周辺地域の景観保全なども行いながら、公園の整備担当部署の沖縄県土木建築部の都市公園課や中部土木事務所等の理解、協力を得ながら、中城公園内にある喜石原古墓群や近代屋敷跡の整備も行い、ハンタ道や中城城跡とともに琉球の石造文化を学べる野外博物館として包括的な活用を図っていききたいと思ひます。



ハンタ道を活用したウォーキング事業

以上のように、中城村、北中城村ではこれまでに共同もしくは単独で、中城城跡の保存や活用に向けた取り組みを行ってきました。現在、両村では共同まちづくり計画の策定作業を進めており、今後は世界遺産「中城城跡」を核として、これまで継続してきた取り組みに加え、これから実施する両村の各種計画も含め、関係各署と緊密な連携を図り、両村の取り組みを有効的に連携させながら推進して行きたいと思ひます。

世界遺産普及公開講座 概報

花井 正光（琉球弧世界遺産フォーラム）

琉球弧世界遺産フォーラムは世界遺産の普及啓発活動のひとつとして市民向けの公開講座を開催してきました。コロナ禍で2年開催を見送ってきたこの公開講座を、今年は幸運にも開催することができました。以下に概要を報告します。

昨夏、沖縄島北部の山域が奄美大島、徳之島及び西表島と共に世界自然遺産に登録されたのを受け、今回はやんばるでの下記要領による開催となりました。企画に際し、世界遺産が重視する若者と地域の参画と、自然遺産と文化遺産の融合の2点に留意した結果、地元で活動実績がある辺土名高等学校サイエンス部と地域団体、やんばるリンクスに協働をお願いし、プログラムは生物文化多様性をキーワードに講演3題とパネル討論で構成しました。

『世界自然遺産を地域の暮らしに活かすツール、生物文化多様性について考える』

日時 2022年7月14日（木）18:30～20:30

会場 辺土名高等学校2階・多目的教室

後援 沖縄奄美自然環境事務所、沖縄県、国頭村・大宜味村・東村・沖縄県ユネスコ協会

支援 (株)おきぎんジェーシービー・(株)ジェーシービー（沖縄美ら島JCBカード寄付金）

◆ プログラム

- ・ 基調講演：『生物文化多様性と地域の暮らし』
湯本 貴和（京都大学名誉教授・京都芸術大学客員教授）
- ・ 講演①：『「大宜味村史・人と自然編」 解題：生物文化多様性とその活用』
当山 昌直（総合地球環境学研究所共同研究員・沖縄大学特別研究員）
- ・ 講演②：『やんばるの森の生物多様性の今
名護岳と西銘岳の森林動物相の比較研究から－名護岳もがんばれ！－』
畑信吾、岡田健吾（辺土名高等学校環境科2年）
- ・ パネルディスカッション 『皆で語る、世界遺産を地域の暮らしに活かす考え方や実践』
上原 蓬（辺土名高等学校環境科2年）
東 竜一郎（辺土名高等学校教諭、サイエンス部顧問）
平良 太（やんばるリンクス、国頭村公認ネイチャーガイド）
当山 昌直、湯本 貴和

司会進行：山川 安雄（やんばるリンクス代表）

花井 正光（琉球弧世界遺産フォーラム代表）

当日は80名余の来場があり、うち27名が高校生で他にも若者の参加があったのが印象的でした。生物文化多様性という聞き慣れない概念も、基調講演の演者による多面的な解説と「大宜味村史・人と自然編」の企画・編集者で聞き取り調査者でもあった演者によるこの地の伝統的な自然利用の豊富な知識を具体的に紹介する講演で、このキーワードの理解と身近な自然と関わるうえでの大事な視点が得られた聴講者は多かったのではないかと思います。また、世界遺産登録地とそこから南に離れた名護市域の森林で、希少種と外来生物の生息状況を自動カメラを使って専門家と共同調査し、両調査地での希少種と外来種の生息状況の違いなどの研究結果を踏まえて、将来の沖縄島全域の森林生態系の保全や回復を視野に、ファイリマングースなど外来生物の根絶を目標に掲げた対策を提言した高校生の発表は会場を沸かせました。パネル討論に登壇した地元在住の高校生の明晰な課題把握と自身がとるべき行動を明言し、会場参加者と交わされる活発な応答を聞いて、地域における人と自然の関わりの再構築に若者の参画が果たす役割の大きさを改めて知ることができました。

今回の公開講座は、当フォーラムが取り組む世界遺産の普及活動に賛同されお寄せいただいた「沖縄美ら島 JCB カード寄付金」の活用により開催することができました。ここに併せて報告させていただきます。



会場の様子（7月14日：辺土名高校）



講演の様子（7月14日：辺土名高校）

連載 人と自然の民俗誌 第7回

クバの島・伊平屋島 人とクバの物語

西江 重信（環境カウンセラー）



伊平屋島のクバ山（1999年：県教育庁文化財課史料編集班提供）



遠方からクバ山をみる（1988年）

神、御座すクバの御嶽：クバの岬は聖地 イベ（威部）

沖縄県最北の有人島、伊平屋島はビロウ（方言でクバ）の島である。島の3カ所の岬にクバの御嶽があり、そこは聖地である。その中でも県の天然記念物に指定されている『田名のクバ山』は地元では「ミサチ（岬）のクバ山」と呼ばれ、全山クバが群生している。特に目を見張るのは、強風と波しぶきに曝される100mに及ぶ垂直の東北面も波打際から山頂までクバに覆われているのである。

立ち入り禁制と罰：神へのおそれ 自然への畏怖 資源の保全の意味合いもあったのでしょう

イベ（威部）、聖地である「田名岬のクバ山」は立ち入り禁止を示す。1本のわら縄が張り巡らせているだけであるが、縄の内側に入る人は、まずいない。不用意に禁止区域に入ってしまった場合、大騒ぎになる。神の怒りを鎮めるため、祟りを祓うため「御祓」をしないといけない。その際の「供え物」としてお米3合とお酒小瓶2本をクバ山の入口の拝所に供えて、「御祓」をするのであった。

入山解禁：年に2回クバの若芽採り解禁 希少な天然資源 貴重な現金収入源

クバ笠、おおぎ、蓑などの生活必需品を作るためのクバの若芽採取は普段はクバ山の禁止区域以外や他の山に



沖縄でよくみられるビロウ（クバ：国頭村2020年）



那覇で売られているクバ笠と扇（2022年）

自生しているクバから採っていた。今でいう持続可能な資源利用を考えた知恵だったのでしょう。神に許しを得て、年に2回入山解禁の日が設けられ、クバのシン（若芽）採りが許されたのである。採取する人の数は一家一人が不文律だったようである。ちなみに、1日採取したクバの若芽は、当時の一般的な1日の作業賃金の2、3倍の値は付いたそうである。採ったクバの若芽はほとんどが県外に売られていた。大正年間からは宮崎県出身の仲買人が伊平屋島で世帯をもち商いを続けていた。終戦後も島に住み続けていて、手先が器用で博学な方で、島人から信頼されていた。

クバは希少・万能な資源　そして匠の技：生活用具や仮小屋の材料等 / 沖縄を象徴する植物　街路樹に最適

蓑、笠、クバ扇等、用途は多岐におよんだ。田名集落に住む興那嶺五太郎さんは蓑笠作りの名人だった。興那嶺さんが仕上げる蓑は、着け心地がよく美しい形をしたまさに工芸品の域だった。蓑は、ウワギ（上衣）とドウウシチャ（胴下）の2つで一揃いの雨具である。その上下共、表はシギ（スゲ）で編まれ裏はクバの若芽を皺を伸ばし柔らかく手を加え張り編み仕上げで、まるでスーツの裏地のようだった。マントのようなウワギの首まわりのカーブ仕様・仕上げは襟なしシャツのように優しかった。興那嶺さんが作った蓑は現在どこにも見当たらない。写真さえ残されていない。残念でならない。

長男の毅さんによると、五太郎さんは、若い頃はカツオ船に乗り、1本釣りでの名を馳せたという。事故が原因で下半身が不自由になり、生計を立て直すために、テイグマ（手仕事）と言われていた、蓑・笠作りを試作・研究したという。



カタムン（型物）と言われた簡単な手作り器具で作業する興那嶺さん（写真提供：興那嶺毅さん）

コラム

クバヌファ（葉）ドウヤシガムティナシ（持て成し）ヌ ユタサ アチサ（暑さ）シラ（涼）マスル タマ（玉）ヌウチワ ※市井口承琉歌
（クバの葉だけど持て成しの素晴らしいこと 暑さを涼しくさせる 宝の扇）

うちわばなしキャンペーン

家庭で職場でクーラーの温度を1度上げて扇を使おうという運動（グループエコライフ提唱）

2008年7月7日～9日に開催された「G8 主要国首脳会議（洞爺湖サミット）」参加の各国首脳に、地球温暖化抑制の象徴的取り組みとしてうちわで涼しい風を呼ぶ伝統文化の良さをアピールするため沖縄の素朴なクバ扇、雅な京扇子、夏の風物詩のうちわを地域の児童生徒が、メッセージを添えて参加国首脳に「手渡すイベント」の実施を環境大臣と総務大臣に提案した。早速両省から丁寧な「断りの書簡」が届いた。警備の都合で対応が困難との理由。（西江重信）



我那覇祐希画

孫の夢
あおぐハジチの手
クバ扇
西江詠